
伝説河童の数奇な人生

瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説河童の数奇な人生

【NNコード】

N4951X

【作者名】

瑞

【あらすじ】

遙か昔

蛙の子は蛙

異端の子は異端

ここに伝説の河童

伝説河童、伝説河童となるる（前書き）

原作が東方Projectの小説です

お楽しみいただけたら幸いです。

伝説河童、伝説河童になる

河童にマヨネーズをかけた胡瓜の美味しいを教えてあげたいと思つていたのが10分前。

そして現在知らない女性に抱きかかえられている。可笑しいかな、10分前までは自慢のボロアパート（笑）の一室で胡瓜を食べていたのだが。一室と言つても、もともと一部屋しかない文句なしの一部屋賃貸であった。

までまでは重要じゃない。一体なぜ見知らぬ女性に抱きかかえられているのだ？それにしても美人だ。萌えるような赤い髪に…間違えた、燃える様な赤い髪に、キリッとした眉。抱きかかえられているためわからないが、この様子だとスタイルも抜群だろう。

「ねえあなた」

「なんだい？」

「この子の名前はもう決めたの？…びつせ付けるなら…この名前にした

いわ

「ちょっと待つてくれ。確かこの辺に…」

赤髪のお姉さんがこのちぢらの髪を撫でながら、後ろにいた青年に語りかける。

ていうか後ろにいたのか。影薄いな。

「うーん。僕の家系のしきたりでは…えーと、この子は25代目だから…「崔」という字を入れて名前を作れば良いんだ」

「崔ねえ… 苗字は決まってるからどうしようかしら？ちなみに貴方は24代目なのでしょう？名前にどの字を入れなければいけなかつたの？」

「僕は…

「うん？25代目？苗字？名前？」

これつて普通赤ん坊が生まれた時の会話だよな？なんで今俺を抱きかかえながらそんな話しある…

いやまた！なんで抱きかかえられてんだ俺？身長175cmだよ！…この女人の人どんだけ大きいの！

しかし体を見てみると手が自分の中ではなかつた。敷いて言うならそれは赤ん坊の手だつた。そう自分は赤ん坊になつていたのだ。

「じゃあ、この子の名前は決定だね」

「ええ。この子は今日から

??????

しんほう の えいさい

これが新しい名前だつた。

どうして自分が赤ん坊になり、新たな名前を与えられ、見知らぬ夫婦に育てられる様になつたのか。

答えは分からぬが、嫌な事でもない。あのままボロアパートに住み続けて将来が明るくなつたとは限らない。もしかして自分は死んだかもしない。前世の記憶を持ったまま転生するといった話しさは、幾つも聞いたことがある。これまで自分がされている事の全てを驚かせる原因であつた、前世（仮）の記憶も最近は薄れつつある。だとしたら生きてみようと思つ。

この河童の人生を。

？？？

ひとまず自分の状況を知る為に、動く事の難儀な赤ん坊の体でなんとか情報を集めてみた。と言つても耳を澄ますだけだが。いやはや自分が河童だと知つた事には驚いた。胡瓜好きが原因か？

新しい名前をもらい、自分が河童だと分かつた事で幾分安心していいた頃、気になる事ができた。

何故孫ができたのに爺婆達が来ないのか？

孫ができたら——それ赤飯だ、それお祝いだ、と爺婆達は喜ぶ筈なのにそれがない。相変わらず母と父だけが家にいる。

後から聞いた話だが、河童の世界の中では母と父は除け者だそうだ。母は人間とのハーフ。父に至つては自分は半分河童の血が入つていいるが、後の半分は分からないらしい。敷いていふれば、我が生みの親は「禁忌の子」なのだ。

河童と言えば日本の三大妖怪の一つ。時代がいつであろうと河童という種族はいわば「ブランド」なのだ。両親は雑種。除け者扱いは当然なのだ。

という事は自分は禁忌の子のクオーターか。

子供ながらに変な事を考えてしまつた。

??????

月日は流れ真逢ノ榮催こと俺はよちよち歩きができる様になつてき
た。言葉は未だに喋れぬが、身振り手振りで要求を伝えられる様に
なつてきた。

手を振り回すーーおっぱい
手を叩くーーかまつてほしい
泣くーーとにかく来い
ベットを叩くーーベットから出たい

友達などいない。除け者の父と母はいつも大変な仕事を回されてい
て、両方家にいるのも珍しい。最近はこの二人といるのがとても安
心を呼んでくれる様になつた。家族という奴だ。

家族つていいよね。家族つて大事だよね？ねえ？ねえ！

何故叫んでいるかなと？

「オオオオ――――――！」

眼前の滝のせいである。

久しぶりに家族三人で外出かと思っていたら、大間違いだった。家を出て、河童の集落の広場についてみれば、同じく赤ん坊を抱いている人達がちらほら。

あーだの、うーだの喋りかけてくる同年代（3歳）くらいに気を取られている合間。

眼前には滝が広がっていた。

「おつふん。これから捧命の儀式を始める。子の名を呼ばれた者の父は返事せよ」

もつさしい髪を生やした河童の爺ちゃんが喋りだした。ちなみにこの爺ちゃんは母と父の事が嫌いだそうだ。甲羅は背負っているが作り物だ。河童なのにこの集落の河童達は甲羅がない。目もない。どこのいつた河童？

「真逢ノ栄崔！」

「は、はい！」

最後に自分の名前が呼ばれた。父さん。張り切りすぎよ。

「では、始め！」

何が始まるのか爺ちゃんの合図から数分が過ぎても、誰も動かない。
寝るぞ俺。

すると突然一組の夫婦が自分の赤ん坊を滝から落とした。
え？ どういった事？

自分の子を滝へと投げ飛ばした夫婦は必死の形相で手を前にだして
いる。そして何かを待つている。自分の子を殺して何をしているん
だ！ だが生憎言葉はひとつしても紡ぎ出せないので、見守るしかでき
ない。

暫く待つと奇妙な事が起きた。

滝の水が逆流し始めたのだ。そしてその水に乗つて、滝壺へと落ち
死んでしまった筈の赤ん坊が上へ上へと登つて來た。

拍手喝采

集まっていた河童達が老若男女問わず騒ぎ褒める。

捧命の儀式

滝壺へと投げ入れられ一度死に、自然と同化する意があるらしい。実際には死はない。親は自分の妖力を使い、滝を逆流させる。子の運命は親の力が握っているのだ。儀式を終えた子には自然からの贈り物で、河童全員が持つ能力「水を操る程度の能力」を授かるらしい。

そして順番が来た。

全員が成功だつたのもあり、あまり心配はしていなかつた。潤む様な目を両親に向けられ、こぢらも見返す。そして俺は投げられた。

?????

苦しい
苦しい

息ができない。水面へと叩きつけられたのもつかの間、息ができない。河童なのに。何故父と母は引き上げてくれない？時々水ごと持ち上がる様な感覚を感じるが、また落ちてしまう。酸素が行き渡らずともな思考ができない。母、父、そして未だ食べてない胡瓜が走馬灯になる。子供の小さな肺で最後の一息を吐き出し、死を覚悟した時にある言葉が頭に浮かびあがつた。

「瑞を操る程度の能力」

意識を失いながらも浮かびあがった事に感謝していた自分は、優しい母の手と優しい父の手に抱きかかえられ意識を失った。

云説河童、旅に出る（前書き）

ちよつとだけ胸を借りた東方二次小説があります。

：

はい。河童村の秘書庫に忍び込んだ真逢ノ栄崔です。
捧命の儀式から数年がたち、心も体も若干大人に近づいた。妖力だ
って唯の熊を倒せる位にはなった。あくまでも普通の熊ではある。
年月を得て妖怪化した熊なんて自分の鼻提灯のような妖力では、ま
だまだ太刀打ちすらできない。能力さえ使えれば良いのだが…

-----能力の使い方が分からぬ-----

普通の河童が持つ能力「水」を操る能力。地球の表面を一番広く覆
つている分子。生命の維持に必要不可欠な存在。だが俺の能力は一
みず一違いで「瑞」を操る能力である。これがさっぱり分からない。
過去に22歳、現在9歳。合わせて31年の知識を総動員させても、
この「瑞」という字が何を表すのか理解ができない。もう少し高校
の国語の時間を集中して聞いていれば良かつたのかも知れない。

これぞ後悔先に立たず

——理解ができない

——それは能力を理解できないが故に、能力を使用できない事に繋がる。

これのせいで村八分されるわ、虐められるわ、河童として認めてもらえないわ……

これぞ泣きつ面に蜂

打開策を撃つべくして忍び込んだ先が河童村の秘書庫。秘の字がついているように大切な物や危険な物が、数多く眠っているらしい。その中でも俺が見つけたいのは、漢字について述べている様な書物。その類の書物が置いてある可能性など胡麻よりも小さいだろう。だが運良く、本当に運良く適当な書物を漁れば、「瑞」に繋がる何かを発見できるのではないか？

それを求めてわざわざカビ臭い秘書庫に来たわけです。というかこれまで分からなければ打つ手なしだ。助けてせんと君。

？？

暫く漁つていれば出るわ出るわ。大きな水晶玉、鍛びた剣、干からびた何かの腕、鈍く光る筆。価値は分からないが、容易に手にとつてはいけない事はわかる。触らぬ神に何とやら。

もう暫く漁つていると、『』つゝ紐で結ばれた『』つつすぎる本が見

つかつた。見るからに価値がありそうな本だ。

「うん？漢字が沢山書いてるけど、さっぱり分からんな。これでも漢検3級持つてたぞ。まあ、見るからに辞典のような物か」

自分がいるこの時代が何の時代かは分からぬが、未だに漢字が導入されてない事をみると、前いた時代よりもかなり前の時代だろう。この書物も達筆な字で漢字が書いてあり、後はすべて不格好な河童文字で書いてあつた。その漢字が生まれた経緯や意味などが詳しく書かれている。恐らく中国で書かれたであろう本を、河童文字に訳したものだ。秘書庫にしまわれているのも納得できる代物だ。それにしてもまったく不便な時代に生まれたものだ。書いてある漢字、殆どが中国本家の漢字のようで、形も複雑だ。

「あ～お…あつた」

数分パラパラとページをめくつてみると案外簡単に見つかった。複雑な漢字の中では比較的簡単な形の漢字、

「瑞」の意味は…

「瑞」――端つてこう字に似てるよね？って。

「…………おうこうつたあああああ――」

何で漢字の辞典なのに意味が書いてないんだよー！」の本の著者を今すぐ出せー！

「作者の名前は…紅糸鈴…くれないいとすず?変な名前だ」

長い河童の人生… 河童生の中でも少しの紅糸鈴にであつたら、文句の三つでも言つてやう。

一人で将来について考えていると、後ろに気配を感じた。隠れようと、思つたが遅かった。遅すぎるぞ栄雀！

「お二...お三...お四...お五...お六...お七...お八...お九...お十...」

「はつ！見つかった！」

「助けてせんとくさん」

一助けてせんとくさん

見回りに来た大人の河童に見つかったので、トンズラ。もちろんミッショニン）の音楽を脳内で再生しながらだ。

?

「母さん」

「どうしたの栄崔？ 悩み事？」

「何でもかんでも悩み事にしないでよ。でも合つてる。悩み事」

「お母さんに言つてみなさい。何かあったの？」

「能力の事。どうして俺は能力を使えないの？」

長い沈黙が続く。「うなるとどうしても立ち尽くす格好になるので、逃げ場がないような気分になる。

「栄崔は… 普通に生まれたかった？」

「え？」

「あなただけ知つての通り私は人間とのハーフよ。お父さんも同じようなもの。だからこの集落では形見が狭いの。そしてあなたの体にもいろんな血が混じり合つている。だから能力が使えないのかもしれない」

そななおかしい。まるで俺を産んだ母のせいで俺が能力を使えない——不幸だと叫つてゐるようなものじゃないか！

「違うよ母さん… 僕が能力を使えないのは自分のせいだし、母さんと父さんの子に生まれた事も嫌だと思った事は一度もない。俺はただ助言の一つでも暮れればといつ気持ちで聞いたんだ」

立ち尽くす母を背に部屋を出た。もし自分が母の立場だったら、自分の子に罪悪感を抱くのは同じだ。障害を持つて生まれてきた子に母親が謝るのと同じよつと。たゞ

能力が使えない

たとえそうでもこれだけの事でこんな気持ちになるのはたまらなく嫌だった。

?????

「尻子玉つて美味しいのかな？」

気分転換の為に一人変な事を考えながら、霧深い谷底の河を歩いていた。嫌な事があるとよくここに来てぶらぶらする。それにしてもこの谷底、河童村からはすぐ近くにあるくせに、あまり人気がない。河童だつて霧深いのは嫌いらしい。自分も嫌いだ。

「みずみずみず」

果たして「瑞」とは何だらうか？読み方が「みず」だからやはり水に関係あるのかもしね。最近は水に関する事を試す事が日課だ。

取り合えず河の水に浸かってみたり、滝に打たれてみたりするがなんら起きた事はない。やはり河童だらうか水で寒さを感じる事は全然ない。

ああ、極楽…というわけでもない。

??

「はつ！」

何時の間にか水遊びをしていたが、突如全身に電気が走つたような感覚を感じた。

妖力だ。それも膨大な。河上からは妖力に当たられて死んでしまった魚が、次々と流れてくる。

普通妖怪にとつて妖力は命の源のような物であり、あればあるほど強いという。もちろん質や技術も大事だが、圧倒的な量があればそれだけで強大な力となる。しかし今感じている妖力はその比じゃ無い。自分にとつて良となる物が、今は自分を恐怖で押しつぶそうとしている。

どうする？ 妖力の源へと行つてみるか？

運が悪ければ死ぬだろ？。其れ程までに今感じてる妖力は殺人的であつた。

帰るか？

否、見たい物は見たい。一体何が起こっているのか？

俺は好奇心に負ける事にした。

来てみれば二人の人物が向き合っていた。

一人は紫を基調とした服を着た妖艶な女性。

一人は背の高い一見すると目つきの悪い青年にしか見えない男。

このどちらもが普通では無い。この殺人的な妖力の渦の中心は間違いないあの女性だ。人は見かけによらないというが、あの女性は人間では無い。もともと人間でも無い。

——妖怪——だ。

それも今まで自分があつた中でも最強の力を持つている。同じ妖怪である自分が100人いようと敵わないだろう。

それと向き合つてる青年も只者ではないのが伺える。まずあの強大な妖力に当たられても微動だにしない。それどころか軽口を叩いてる様にも見える。うん？ちょっと緊張はしているらしい。一体何が起こるのか。自分の事など忘れ、初めて見る大妖に心を奪われた。

突然女性の方の殺氣と妖力が増えた。それと同時にいくつもの動きが連続で行われ、

ドツツツツカアアアアアン！！

大爆発が起きた。

何なんだあれば？突然変な境目の様な物が見えた瞬間、男が消え大爆発が起きた。残つた女の人は傷だらけのように見えて傷などついておらず、服が少し焼けただけだつた。遠くから見てたからいいもの、もし近くにいたら間違いなく死んでいた。

——強さ

これがあれば何でもできる。

抑圧される事も軽蔑される事も非難される事もない。

強くなりたい

「強くなりたい」

??????

「こういふ事で旅に出ます」

自分の思い、河で見た事、自分の目標。これらを小一時間程かけて説明した。母と父の顔色は常に対極であった。

「栄崔、なぜそんな事を?」この生活が嫌なのか?それなら父さん頑張るから」

「あなた。栄崔は自分で旅に出る事を決めたのよ。それに栄崔がここで暮らしていく事で、何か良い方向に繋がるとは思えないの。ならこいつのひとと自分で歩むのもいい事じゃない?」

その通りだ母よ。

そして父よ。少しは信頼しない。

「母さん。父さん。別に永遠の別れでもないし、うん百年か一度は帰つてくるからだ」

「でも、道中危険だぞ。お前はまだ妖怪の世界では唯のこわっぱじやないか?」

「それなら平気よ。栄崔には守護の筆を渡したから」

守護の筆

中国の有名なお坊さんが、自分の子供の頃の毛を30年かけて探し出し作り出した、法力の宿った筆。人間でいつ成人。その頃でいう15歳までなら害意を持った物を防ぐ力を持っている。生憎河童である栄崔の寿命から見れば、ちっぽけな時間が旅に出て数年の間は身を護る事ができる。その間に修行修行修行である程度強くならなければ。

「それって…秘書庫にあつた物だよな？」

その通りさ父さん。

「私達の息子の安全の為よ。それぐらい許されるわ」

「そんなものか？」

「そんなものよ」

やばい。空気になつてきた。ここはかつしょくべ決めて旅に出なければ

「行つてきますー。」

「うして真逢ノ栄崔は旅に出た。」

後日 もつさり髭のジジイが筆が無くなつた事に気がつくが、そ
の頃栄准は遙か彼方を歩いていたのです。

真逢ノ栄崔、旅を始めて早10年、心身少し大人に近づき、母から頂いた（母が盗んだ）守護の筆は、既に役割を終え、今では旅の相棒なり、されど未だに能力はすっからかんなり、妖力体力忍耐力、先の二つは鍛えたか、なかなかのもの、しかし後ろ一つはまだ童。

さてさて

この10年間特にこれといった出来事は無かった。ポツリポツリと各地を練り歩いただけである。こっちの世界では何処の誰よりも一番物事に詳しいと思っていた。未来から来たようなものだから。しかし違った。ケータイを使いこなす若者に、ケータイを作つてみろという様なものだ。

いくら現代の知識があつたとしても、こちの時代の土地勘、知識は0。結果的にはただほつつき歩くだけになつていた。でもまあ、楽しかつたから良しとする。

そして今現在俺は大きな港町に来て甘味屋にてお茶と団子を貪っている。質素な作りの店は客はすっからかんだが、陽気に団子を食べられるような雰囲気を醸し出している。

そして美味しい。

前世で食つてた団子なんて例100円の御手洗団子だけであつたので、この赤緑白の団子は目の保養（使い所乙）になる。そして現在串の一番下にある団子をどう食べるか思考中だ。

うん。左右から一度食べよう。

要するに暇な訳だ。旅の当初は自分の能力の事について躍起になつてたが、今では時間が解決してくれると信じ、ほつとてている。行き詰まりという事だ。

たつた一つの漢字の意味がわからなくて、立ち往生する事にならうとわ。

「それにしてもこの団子美味しいな

一人呟くと

「おー兄ちゃん見る目があるねえ。それは大陸の方で作られたもんなんですか」

「へえー。大陸かあ」

店主の世間話。

「そうですね。大陸です。近頃はここも発展して、その類の船が増

えましたからなあ

「もぐもぐ（そうかそうか）」

大陸とは考えて無かつたなあ。河童村を出てからといつもの、当てもなく彷徨つっていたわけだし。未だに日本だって回りきつてない。思いつかなかつたのも無理はない。

——大陸、少し考えてみよう。

「おっちゃん。面白い話を聞かせてくれてありがとう。お茶も美味かつた！」

「ありがとさん。また来てくんさいな」

店を出れば、そういうの頃河童だと感ずかれる事も少なくなつたと感じた。初めの頃は、経験の少なさ故か感づかれる事も多々あつたのだ。

河童のくせに人間臭くなつてきたか？

独り言を言いながら暖簾をくぐると、少し先にある蕎麦屋が目についた。我ながら驚く食欲だ。食つても太らず力になるというのもまたオイシイ。

さて、今度はあの蕎麦屋にでも行つてみよう。海老あるかな海老。

大通りを半分程行つた所で、後ろから大きな音がした。何事かと振り向けば二三台の馬車が勢い良く此方に走つて来ているのである。これは危ないという事で軽く右に避けた瞬間、逆の方からから近づいて来ていた馬車に跳ねられた。

大空高く…とは言えないもののそこそこの距離を吹つ飛ばされ、行こうとしてた蕎麦屋に顔から突つ込んでしまった。

これは手伝ってくれたとみるべきか？

阿呆な事を考えつ、意識を失った。

？？？？？

「あいたたた」

目を覚ませば眼前に広がるのは知らない天井…ではなく冷たい石で出来た天井だった。

目を前に向ければ鉄格子。

牢屋である。

何故馬車に引かれた自分が牢屋に入れられたか。この理由は至極簡単だ。

——妖怪だとバレた

まあそれは大事じゃない。早くここから出なければ間違いなく殺される。

しかし今頃は馬車の運転主は罰せられるどころか、妖怪退治に協力したといつも天井で賃金でも貰つてゐるのではないか？理不尽なものだ。

向かい側にも牢屋はあつたが誰もいない。この妖力の残り香から推

測するに、ここは妖怪を捕まえておく為の場所だろう。

ひとえに妖怪と言つても恐らく自我の無い低級な妖怪だろう

ある程度力を持てば、まずこの様な所に連れて来られる訳がない。

「俺は？」

一人シクシクと泣いている

「おや？ 河童かい？ こんな大きな町に河童がいるなんて珍しいね」「誰だ！？」

薄暗い牢屋の何処からともなく聞こえた声に俺は身構えた。おかしい。先までは気配など無かつた筈。しかしそれはすぐに納得へと変わる。声の持ち主は一本角の鬼だった。それも幼女の。

「何故鬼がここに？ 鬼と言えば最強の一文字。わざと捕まらない限り、この様な所に幽閉されるような種族じゃないだろう？」

「ほう。鬼に敬語を使わない河童は初めて見たよ。よっぽど世間知らずか馬鹿なだけだろう……でもなかなか気にいった。その度胸に免じて教えてやろう。聞きたいか？」

こちらの意見以前に聞かせる気満々の幼女……鬼。

「実はな酒屋で角を隠して酒を飲んでいたんだがな、そのまま酔いつぶれてしまつたわけだ。きっとその時には角も見えてしまつていたんだろう。結果、酔い潰れた末に、ここに運びこまれたんだろうよ」

見た目幼女とはいえやはり鬼。永く生きている者の口調だ。しかし鬼を見るのはこれが初めてだつたり。

「それはまた豪快な…では何故ここから出ない?鬼なら平手打ち一つで叩き割れるような壁じやないか?」

——鬼

日本最強の妖怪

その理由は純粹なる怪力

その凄まじき怪力一つで日本妖怪の頂点に立つて いる種族である人間から見れば大きな岩でできた壁も、鬼から見れば障子を破るがごとく容易い。

「それがねえ…」この牢屋には鬼封じの札が貼られているようですねえ…

幼女鬼は苦笑する。

確かに牢屋の至る所に「鬼封」と書かれたお札が貼つてある。ここにいる鬼は人間以下の力すら出せまい。読み方は「きふう」。ここテストに出るよ。

「詰まるところ力が出せないと?」

「そういう事だ」

これは可笑しな状況だ。最強の妖怪が自然界では最弱の人によつて

作られた牢屋の中で身動きとれないとわ。しかし札か…今は何時代だろうか?

「出よひとは思わないか?」

「そりや出たいさ。でも今の私は赤子同然の鬼。叶わんよ」

「それにしても余裕顔だな」

「永く生きてこると全ての物事を遠くから眺める様になるのだよ」

——永く生きている

この鬼は一体どれだけの時間を過ぎ「」したのだろうか?

「此処にいるとどうなる?」

「さあねえ…実験にでも使われちまうんじゃないかい?妖怪退治なんかの」

「それは…」

実験道具にされちゃあ困る。これは脱獄するしかないな。鬼が一ヤ二ヤしてるのは都合上無視だ。

「ちよつと下がつていてくれないか?」

「何をする氣だい?…まさか檻を壊そつていうのかい?」

「いいや、生憎鉄は苦手でな。触るだけで力が落ちてしまつ

河童とは水の妖怪。弱点は本質が同じ水と一緒にである。渴きを止める火、水を汚す金属。栄養に至つてもそれは変わらず。

「ならどうする?壁でも壊すのか?」

「その通りだ」

俺の答えを自信満々と否定する鬼。やはり何処となしかこの状況を楽しんでいる様な気がするのは氣のせいか？

「いやいや、例え河童が普通の妖怪よりは怪力でも、この辺の壁は無理だろ？」「

鬼の声を背に、構わず壁に向かって助走をつける。

渾身込めて

「それが、違うんだな！」

ガアア――ンンンン――――

壁をぶん殴った。

??????

「いやあ～驚いた。河童にもこんな奴がいたんだな！」

俺と鬼は牢屋から逃げ出したあと懲りずに先とは違う甘味屋に来ていた。もちろん角は隠してだ。とはいえる鬼の一方的な絡みだが。

うん？今幼女鬼が手拭くのに使つてゐるのつて先の「鬼封」の札じゃないか！触つて平氣なのかよ…騙したなジュリエット！

「で？見た所年も小童のくせに何故それ程の腕力を？」

「俺はある事情があつて能力が使えないってな。旅に出てからこの方、ずっと肉体訓練ばかりやってきた」

「それはそのキラキラ光つてると関係あるのかい？」

鬼が指差す先。先に壁を殴つた握り拳の先の方が銀色の鱗で覆われていた。これこそが河童である証。俺は甲羅も皿もないが、この河童の護鱗だけはちゃんとあつた。

——河童の護鱗

皮膚の下にある訳ではなく、強い衝撃や切り傷を受けた瞬間、皮膚が硬い鱗に変化するのである。格好良く言えば自動防御システム。全身が護鱗になると格好良くなれる気がする。うん。

自分の意識で変えられる訳ではなく、鱗になつて暫くするとまた元に戻る。名前の通り身体を守る為にある物だが、逆転の発想で、硬い物などを殴つたり蹴つたりする事にも使える。便利な物だ。

馬車に引かれた時なぞ恐らく身体の半分がキラキラと輝いていたであろう。蕎麦屋の店主だつてたまげたに違いない。妖怪とばれない方がおかしい。

「この鱗がなければ壁を殴つたりなんてしなかつたよ。つておいおい、何殴る準備してんだよ！」

「いやあ～ちょっと試してみたくて」

流石に鬼の怪力で殴られたらただじやすまない。鱗ごと叩き割られる事は容易に想像できる。生憎俺はまだ死にたくない。

「まあ、お礼は言つとくよ。あのままじゃあ私も危なかつたし。ありがと！」

「いや、いいんだ。妖怪仲間だろ？」

「鬼は恩は忘れない。何か困つた事があつたら、鬼に頼めばいいよ。鬼神母神を助けたと言えば大抵は融通が効くから」

：

え？ 鬼神母神？

「き、鬼神母神？」

「そうだが」

「そ、そんな！」「めんなさい」「めんなさい！まさか鬼神母神様とは知らず、ご無礼を！」

「おーおー、私はお前のその何事にも動じない性格が気に入つてるんだ。そこりにいる様な堅物な妖怪になるんじゃないよ」

いやいや、日本最強の妖怪を田の前にして普通の口調で喋れるか！

鬼神母神とは全ての鬼の母であるとされると同時に、他人の子を食べ続けたという恐ろしい存在である。でも田の前の幼女がそんな存在とは思えない。

「ま、お前が生き続ければまたいつか会うだろう。そういうえばお前は能力について悩んでると言つたな？それなら紅糸鈴という女性を訪ねればいい。達者でな若河童」

サアアアーー

そう言い残すと鬼神母神は霧のような物になつて消えて行つてしまつた。

一人残つた俺は自分の運の良さと、迂闊すぎる性格に挟まれる様に悶々としていた。

??????

さて、これからどうしよう。

幼女鬼、鬼神母神と別れた後も町をぶらぶらしていた俺は、無性にも何か行動を起こさなければと感じた。

何処かで聞いた様な名だが、この短き河童人生の何処で聞いたのかさっぱり思い出せない。きっとこれも時が解決するだろう。これは早くも年寄り思考になつてきたなと思いつつ、甘味屋に入つて行く。

そこで思い出したが店主の言葉

——大陸

「決まりだな」

大陸に行つてみよつ

伝説河童、脛を蹴られる（前書き）

いつ、指摘とかしてくだとると、嬉しいです。

伝説河童、脛を蹴られる

「スープをどうぞ」「あ、ありがとうございます」

火山の様に湯気を吹きたてるスープを渡される。

「キムチをどうぞ」

真っ赤なオーラを放つキムチを渡される。

「あ、いえ、辛いものは」「そんな事言わずに、さ、さあ…」「ふ、ふひ〜べえ！」

河童こと真逢ノ栄崖。いかにしてこのよつたの状況になつたのか。

？？？

紅糸鈴を捲すべく大陸に行く事を決めたはいいものの、船に乗つて来てみれば一步手前の朝鮮半島。おまけに寒い寒いと言つたらありやしない。どの位寒いかと言つと、鼻水が既に鼻の中で凍つて出でこないぐらゐ寒い。そんな気候の中、河童の俺でも、3日も食わず飲まずで雪の上を歩き続けたらそれは倒れる。

では何故何も食えなかつたのか。

朝鮮の港に着き暫くはこれといった事もなく、そこらをぶらぶらしていた。甘味屋、蕎麦屋、地域特産店…日本にあるものと概要はほど変わらず、中身が少し違う朝鮮の町を歩き回つた。うん。朝鮮旅行もなかなか楽しくなってきたぞ、と本来の目的を忘れかけていた頃。だがしかしそれでは唯の旅河童になつてしまつと思う、中国を目指して歩き出した。

——自分は妖怪。トライアスロン余裕。

わけのわからない自信と共に、地図も買わずに中国に向けて北へ北へと歩き出した。歩けばまた何処かの村にでも着くだろう。そしてその幻想は現実とはならなかつた。

結果が迷子、ひどく言えば遭難である。
これはまずいと感じながら徒步を早めた三日目に、大雪に襲われ意識は朦朧。何か、何か食う物さえあれば。

そんな時視界に入ったのが一軒の農家。正確には大きな集落の中の外れの方に位置する家だ。それはそれは仏の様に見えた。もちろん仏に見えたのは農家ではなく、畑に生えていた胡瓜。あれさえ食べれば、もう三日はもつ。疲れを忘れ走りだし、胡瓜を手に持つ。しかし最後の良心。これは農家の人が汗水流して作り上げた結晶。その様な物を勝手に食べてしまつてもいいのだろうか?渦巻く良心と欲望。

真逢ノ栄崔ここに決めた。

俺妖怪 悪い奴 悪い事してなんぼ

「うして俺は胡瓜にかぶりついた。

…？

濃厚な苦味

野菜種族名「ゴーヤ

「な、なんじや」「うや…」

大雪の中で名台詞を言い放ち、真逢ノ栄崔は「ゴーヤ」手に倒れこんだ。

その姿は後に

「鬼に金棒」ならぬ「河童にゴーヤ」とことわざを生む発端になつたのだ。

？？？

そして冒頭へと戻る。

久しぶりの旅人だとかなんとか言って俺を介抱してくれている。どうやら妖怪だとばれていないようだ。ばれたらそれはどうなる事か…

「うなればあの苦い胡瓜^{ゴーヤ}を盗み食いしていた事は、墓場まで持つて行こう。」

「あの、もう大丈夫ですよ。おかげさまで体調も回復しました」「本当にですか？ 体はまだ冷たいんですけど」

「あ、これは体質なので大丈夫です」

河童の体質というやつだ。爬虫類みたいなものだからな。

「でも今日一日無理をしてはいけませんよ。我が家特性の河童のダシ汁入りスープを飲んだからには、風邪なんて吹っ飛んじゃいます」「お気遣いありがとうございます。慈音ちゃん。といひで…今なんて言つた？」「え？ 吹っ飛んじゃうと…」

「いや、その前」

「河童のダシ汁入りスープと…」

「そ、そだつたな… あははは、は」

きっと何かの比喩だ。忘れよ。

俺を介護してくれているのはこの集落の女の子の一人、杏 慐音ちゃん。死ぬ寸前（主にゴーヤの件）だった俺を親身に相手してくれた。この恩は忘れない。俺が忘れるまで忘れない。

「では、私は仕事があるのでこれで。そつそつ、三日位ならこの家にいても大丈夫ですよ」

「ありがとう」

「ではゆっくりと」

逆に言えば三日程しか俺を預かる余裕がないという事だな。まあ、助けてくれた事だけでもありがたい。

実を言えば体調はもう万全だ。妖怪、河童である。それが故に身体の頑丈さは人を超す。では何故倒れたか。

——精神

三日三晩飲まず食わずに歩き続け、俺の精神は磨耗しきっていた。それに追い討ちをかけたのが、あの苦い胡瓜である。

妖怪は肉体は強靭だが精神は一度揺さぶられれば、恐ろしく弱い。何故なら妖怪とは、有象無象への何かしらの恐怖が元となつて生まれた存在だからである。本質が肉体でなく精神である妖怪にとつて、気持ちの持ち様はとても大切、故に倒れた。補足すると神とは何かへの頼る思いが集まって生まれたものだ。当然それが消えれば神も消える。妖怪もそれは同じ。

??????

暫く休んで外に出てみれば、雪は止んでおり集落の人達が働いていた。農業主体なのか、ほとんどの人の服は土で汚れている。知ってる人がいないので自然と慈音ちゃんを目で捜す事に。

「どこだー？」

いた。背丈よりも大きな箒を幾つも持つて、よたよたと歩いていた。

小さいうちから大変だな、と感傷に浸つていると、これまた大きな米袋みたいなのを押し車に沢山積み重ね、慎重に運んでいる少年が目に入った。

これはフラグが前転倒立をした気がする。

何気なく散歩しているふつをして、今までにすれ違おうしている人に近づく。

そして事は起きた。

慈音ちゃんと少年の肩がぶつかる。よろける一人。もう一人不安定な米袋は重力に逆らう事なく、慈音ちゃんに襲いかかる。ベタすぐる。

「ふつー！」

それを片手で支える俺。

これは決まった。

「気をつけないと怪我するぞ」

米袋を少年に返し、俺はクールに立ち去る。するが、これ以上前に進めない。見れば慈音ちゃんが服の裾を掴んで

「あつがとつ…」

うん。来たねこれ。年齢と彼女いない歴が一本線で結べる俺ことつては革命的出来事。ゲバラ…

どうじたしまして、と言葉を残し、去ろうとするが、またもや前に進む事ができなくなる。今度は何だと振り返れば、少年に服の裾を掴まれていて

「けつ…」

蹴られた。

少年に蹴られた。

一番痛い脛を蹴られた。

おい！俺のお陰でお前が加害者にならずに済んだんじやないか！最近の若者は教育がなつとらん。

しかし…110は歳の差を考えてにっこつと

「どうした？」

「俺の方が強いんだからな！バー！カ！」

「なぬ！」

ムカつと来ました。

おそれくあの少年は慈音ちゃんに恋心を抱いてたんだな。それで俺

をライバル視したのか。

若いって素晴らしいと思う。

泣きながら畠の方へ走つて行く少年。それと対比的に頬を染めている慈音ちゃん。まるで午後ドラだとか思う。

じやあ、此処ら一帯で一番大きな家の障子の隙間から、こっちを凝視している婆ちゃんは姑役…

ハツ！

見られている。

俺の事をジツと見ている。

負けじと見返す事30秒。

手を振つてあつち行けをされる。

なら立ち去るづ。

少し慌ててもう一度あつち行けをする婆ちゃん。

これはこっちに来いの意だと理解。

何か嫌な予感を感じながらも、とりあえず婆ちゃんの所へ行つて見る事にした。

招かれた家に玄関から入つて行けば、俺を泊めてくれている慈音ち

？？？？？

やんの家よりも、小綺麗で一回り大きかった。

居間で待っていると、婆ちゃんが煎餅と茶を持って現れる。

「わへわへ…何から話わつかのう榮崖君…」

「俺の名前を知っているんですか?」

「ふおふおふお。お主がゴーヤを盗み食いした事もな

あらーばれていた!

しかもゴーヤだつたのかよ!

「あれひてゴーヤだつたんですか…びつりで苦いと思いました…この度は盗みを働いた自分を介抱してくれた事、誠に感謝します」

様子からするとこの婆ちゃん、村で一番偉いのだろう。もし追い出せと言われていれば、俺はこの集落で骨を休める事ができなかつた。

「いいんじや、いいんじや。なんとなく先立つた息子に似ていてのう

「…う」

「やうですか…」

暫くはバリバリといつ煎餅を食べる音と、ざざざとこつ茶を飲む音だけが響く。

「といひでなあ、一日後に、とあるお方がくるのじやよ。それについて少し頼み事があるんだがのう。いいかな?」

「頼み事?どの様な?」

「ふおふおふお。年寄りになると遠回しな言い方が好きになるでな。一つ試してみよう。お主が食べたゴーヤ、何かおかしな点は無かつたかのう?」

胡瓜だと思つていればおかしなところだらけだったが、『ゴーヤと知れば特に不審な点はない様に思える。

「と、特に何も無かつたんですけど……」

「ふむ。ちとばかしいこの回転が遅いよつじじやの」「

頭を指差しながらにやける婆ちゃん。

「な、なら一つぐらいヒントをくださこよ」

「そうかそうか。では一つ。ゴーヤとはどの様な所で穫れる?」

「どのようなつて……」

『ゴーヤと言えばゴーヤチャンプル。沖縄だ。確かあそこは日本で一番暑い……

暑い?

「あれ?此処つて物凄く寒いのに……なぜゴーヤが」

「ふおふおふお。正解じや。実はのう、一日後に来るお方の力のお陰なのじやよ。そのお方の好物という事もあるがな」

寒い所で穫れる筈のない野菜を穫れるようにする力……

深緑……

間違えた。神力だ。

「神様の影響ですか……」

「その通りじゃ。そのお方がゴーヤが大好きでのう。特別にこの地に神力を流し、ゴーヤを育てられるようにしたのじゃ」

思えば外は極寒の寒さなのに、集落はどことなく暖かかった。この地を治める神がなしていた技だったのか。

「それで。頼み事とは？」

「ふおふおふお。河童であるお主にその方がこの地にいる間、世話役をしてもらいたいのじゃよ」

「世話…ですか」

「世話と言つてもただそばにいていろいろと使いつ走りをするだけじゃ。どうかのう? 勤めを果たせば本物の胡瓜10本で…」

「乗りましたその話!」

こつして俺はこの地を治めるという神様の世話役に抜擢された。まあ、一度位は本物の神様を見てみたかった事だし、ちょうどいい。それにして河童だという事までばれていたとは…年寄りは怖い。

伝説河童、相撲を取る

八坂刀売神 やさかとめのかみ

これが真逢ノ栄崔こと俺が滯在している集落の人達が崇めている…
というよりも信頼している神。

——八坂刀売神——

神道の女神で、建御名方神の妃神である。その伝承の殆どが諏訪地方にあり、一説では諏訪地方固有の神であると考えられている。

諏訪地方固有の神。つまりは日本の神様だ。何故、朝鮮半島の集落で祀られているのか。この理由がまた、いと可笑し。

何十年も昔、八坂刀売神は夫である建御名方神と喧嘩…俗に言う夫婦喧嘩をしたらしい。こうなれば家出だ家出と息を巻いたのはいいものの、日本においては日本の神である夫の神通力によつて、全てが覗き見される恐れがある。家出を覗かれるなんてそれは嫌。自分だって神なのだが夫の干渉を防ぐような力はない。
ならどうするか？

日本の神道の力が届かない所に暫く旅行にでも行けばいい。そしたら夫も戻つて来てくれと泣きついてくるだろう。一人では飯も作れない夫なのだから。武神のくせに。

こうして決定したのが朝鮮半島。ここでは自分を信仰する民がいない。すなわち神力は溜まらず、使えば使う程減っていくという状態に陥る。だからこそ八坂刀売神は神力をセーブしつつ、朝鮮旅行を楽しんでいたのだ。

そして問題は起きた。

飛行機が遠くの地に行く場合、行くのに必要な燃料と帰つて来るのに必要な燃料を計算する。

八坂刀売神は後者を忘れていた。

さて、そろそろ夫も飯が食えず、押入れに閉じ籠つてのの字を書きながら泣いている頃合いかな？

直感で感じた八坂刀売神は一ヶ月程いた朝鮮半島を離れる事に。

だがしかし

神力残り2割

やってしまった。

やってしまったのだ。

帰る分を忘れていたのだ。

こうなれば一考の猶予すらない。街から街への移動中だつた八坂刀売神は、すぐさま帰りの歩を早めた。しかし願い叶わずなけなしの神力が限界を迎える。朝鮮で八坂刀売神を知ってる者などないに等しく。信仰する者などそれこそない。

この様な異国之地で消え去るか…

八坂刀売神が走馬灯を見ている時に同じくして、消えゆく八坂刀売神を見ていたのがお婆ちゃん。巫女修行の途中だつたお婆ちゃんは、八坂刀売神に何が起きているのかすぐに気がつき、八坂刀売神の巫

女になる事で八坂刀売神の一命を取り留めた。僅かながらの信仰による僅かな神力の提供である。

そして現在この集落と八坂刀売神は、有効な関係にあるという訳だ。はつきり言って八坂神のお茶目度満載の話だつ

「ゴスツ！」

「あ、ごめんなさい殴らないで下さい。お願ひします八坂刀売神様」

お茶目という言葉が気に入らなかつたのか、軽く横腹を殴つてくる八坂様。

「ふむ。お主、栄雀と言つたな。河童じゃろう?」

「よくお分かりで」

さすがは神と言つたところか。

「だが、色々と混じつておるな。父も母もその類か?」

「ええ。母は人との、父は…分からいそうです」

「ふむ。今の時代そういう事はよくあるからのう…嫌か?」
「いえいえ。両親から貰つた血、大事な私の一部です」

「今時珍しい河童だな、お主は」

「ははは…」

「ここはお婆ちゃん宅。お婆ちゃん、八坂様、俺の三人で三角を描く様に雑談中だ。お婆ちゃんには今まで名前を聞いていなかつたのだが、改めて聞いてみれば、知枝、という名前だそうだ。通称、知枝婆。

「それで? 巫女よ。何故故に私を呼んだ?」

「それは八坂様…ここ最近集落の近くに不穏な匂いがいたしましてな。少しお力をお借りできないかと。私も歳故に…」

少しばかし声の調子を抑えて話す知枝婆。この分だと集落の他の人にも話してはないのだろう。俺は一応部外者という事で大丈夫なのか?

「ふむ…確かに嫌なモノがこの地を踏んでるのう。それも二つ。厄介だ」

考え込む様な八坂神の声。俺はまるつきり分からぬが一応、うんうん、と頷いておく。

「明日にでも行つてみるとしよう。だが今日は宴会を開くが良い。ゴーヤ料理もな。その方が私も力が増すのだ」

もう初めからそれ目的で来たのでは?
と、疑いたくなる笑顔。そして此処でゴーヤか。

八坂刀売神が来た事を祝う。即ち八坂様への信仰心が上がる。よつて神力が上がるという事だ。神とは自分で力を作れない。その分、他人の信仰によって力を作る。それ故に神力とは、この世にある力の中で一番力を持っている。一番得にくい力でもあるが。

「ところで巫女よ。使いつ走りが欲しいのだが適任はあるか？」

「はい。そこに」

知枝婆の指の先には勿論俺。はじめから決まっていたので、俺は手を上げて合図する。そんな俺に

「チエンジだ」

「へ？」

「チエンジだと書いてある」

「W h y?」

「河童如きが我のお供など到底務まらぬ」

「あいおい。それはないだろう！」

「八坂様。こやつ栄崔はなかなか面白いものを持っている故。少しばかし抜けていますが、八坂様を楽しませるのには、事欠かないでしょ？」

にやけながら話す知枝婆。

「ふむ…巫女が言つならそうなのだろう。栄崔よ、面白い物とは何か？」

「いや、特には…」

「やはりチョンジだ」

いやいやそれはないだろつ。何処の風俗店だ。

「実は…不思議な能力を「まあよい！宴会の準備じや！」

八坂神はなかなかマイペースな神様だ。本当にこの人の夫が俺には
気がかりです。

「へいへい。準備すればいいんでしょう？すれば

「なぬ？」

「すいません。八坂様。ただいま

胡瓜の為、胡瓜の為。

こうして宴会が始まるのである。

??????

えんやえんや

大騒ぎである。

集落の真ん中にある広場でそれは行われていた。

村人は八坂神が来たのを口実にハメを外して、騒ぎあつてゐる。だからといって俺が騒げるという訳でもない。

八坂神は広場の真ん中の、大きな神台の上で飲んでいた。言うなれば大きな卓袱台の様な物で、その上にいるのは使いつ走りの俺と巫女の知枝婆だけである。

神台の上の卓袱台の上には、これでもかと酒と料理が並べられている。大層な事だ。

俺は酒のお供をなしてゐた。

「でのうーその時諏訪の力エルがのうー

「はい…はい…

「帽子が吹つ飛んでのうー

「は…はい

かれこれ3時間。この間ずっと同じ様な話を聞かされていた俺の精神は逝く寸前。話に出てくる諏訪の力エルすらも恨みたくなる。心に護鱗を敷き詰めないと野暮な事を考え始めていた。

飲み始め当初は

「八坂様、少しばかしお教えて頂きたい事が
「神に言つてみ」

お猪口の酒をちびちびとカリスマ全開で飲んでいた八坂神に問いか
ける。

「「瑞」という漢字の意味がわかりますか？」
「お前は我を馬鹿にしておるのか？」
「いや、ただ無知故に私は知らなかつたので」
「「瑞」という漢字はな」「瑞々しい」などに使うでは無いか？」
「あ、それがありましたか。でも、その他には……」
「それ以外は知らんな。神であるが、漢字が全て分かる訳でもない
のだよ」
「そうですか……」
「それよりも少し酒をもつて来るがよい栄崖よ」
「はいはい」

じゃあ、俺の能力って何かを瑞々しくさせめるのか？まあ、違うだろ
う。もしそれだったら果物屋でも開くか？冷蔵庫要らずで、いつ迄
も瑞々しく果物を保存できる。これは儲かりそうだ……泣きたい。

この数分後から酒の回った八坂神は、やれ芸を見せろ、やれ酒を持つて來い、やれ私の裸が見たいか、の始末。因みに河童芸として、集落の屈強な漢達と相撲をやらされ、拳句には八坂神も乱入して来て、全員ダウン。いとおかし。

そしてまた現在

知枝婆に助けを求める視線を送れば、首を降られる始末。いつその事自分も酒を飲み喰らつて潰れてしまおうか？

その時俺は見つけた。有名な酒「鬼殺し」の横にある「神殺し」と

いう酒を。先迄は無かつた筈なんだが。中身はあまりにも毒々しい薄紫色。死んでも飲みたくない色合いだ。未だに「力エルが」だの「お漏らし」だのほざいている八坂神の皿、ゴーヤチャンプルの乗つている皿に少しばかしそれを混ぜる。罪悪感など雀の涙、虫の鼻糞。

それを知らずに食つた八坂神は

「うーーー

バタンキューである。

これじゃあ唯の酔つ払いではないか。本当に神様なのか？

八坂神が倒れた事で幾分か軽くなつた気持ちで周りを見渡せば、それは平和そのものだつた。人が騒ぎ、人が泣き、人が笑う。自分が妖怪である事すら忘れる様な平和。八坂神にはこれを守つてもらいたいものだ。

生まれて始めての宴会は八坂神の酒癖と共に、栄崔の心へ好印象を植え付けて終わつていつた。

??????

月が空を支配している時

八坂は目を冷ました。

2畳程の距離の先には栄崔が横たわっていた。

「少しばかしハメを外しすぎたかのう」

ついつい友達の阿呆話を聞かせ過ぎた。栄崔の背中には少なからず呆れが見える。

「帰つてこれらたら、加護でも『えてやうつかのう』

何の接点も無かつたこの河童に、自分は不思議と親近感を覚えていた。だからこそこれから行く場所が惜しい。

「〔瑞〕…か。今のお主には大き過ぎる物じや。お前が良い奴に成つてくれればそれで良いのだが」

月を見つめ

「達者でのう」

薄暗い中、八坂刀売神は、森へと一人、入つて行つた。夫の顔を思い出しつつ。

？？？？？

——摩馳—— 梁騰

共に中国に伝説の残る邪神である。

摩馳は赤黒い小さな体に、6本の巨大な腕。小さな体には、13対の目玉がギラついている。巨大な腕の先には全てを切り裂く鉤爪がついている。人肉を好み、特に赤ん坊を好んで食していたという。

梁騰は青黒い大きな体に、これまた巨大な腕。それは鬼の様で鬼ではない。梁騰も人肉を好んで食べていたという。

この二人の邪神が一人の神と対峙しあつていた。

一人の神というのは、言わずと知れた八坂刀売神である。中国の邪神と日本の神が朝鮮の地であいまみえる。

少しばかし開けた所。

いつもなら鹿や熊などの動物が睡眠を取る場所なのだが、今はいす。

栄崔が滞在していた集落の巫女、知枝婆が感じ取っていたのはこの二人の邪神の気配であった。この邪神達、中国であまりにも悪事を働いた為に、とある人物によつて痛手を負わされたのだった。それ

に乗じた人間たちは、喰われた者達の仇討ちの為に、中国全土を追い回した。

結局稜騰と摩馳は朝鮮の地へと逃げのび、この集落の近くに辿り着いたのである。

「それで？素直に立ち去る気は無いのかい？」

答えは既に知っている。

「人肉を喰らい、力をつける為に来たんだ…わかるか島国の神」
「生憎此処は私を信仰してくれている。この半島の一介の集落此処を護るのが、島国の神の役目なのだよ」
「ほざけ雌豚が！」

互いに互いが睨み合つ。

常識的に考えて分が悪いが、二人の邪神は大分弱つてるのでいるかもしない。

ザツ！

先に動いたのは気性の荒い摩馳であった。

その6本の腕に邪力を纏わせ、八坂神を引き裂こうとする。

「弱い」

嘲る様な八坂神の声。

まるで滑る様に、高速で、土の中から御柱が突き出す。それは突進する摩馳を上へと弾き飛ばす。同時に上から降つて来た、より巨大な御柱の底に摩馳を張り付かせた。地面とのサンドイッチ。これは遊びではない。消し合いなのだ。

ズドオーンン！（グチャリ）

不快で耳障りで吐き気をもよおす声と共に、摩馳は潰れた。御柱が地面と抱擁をさせたのだ。

邪神ともあらうものが。

「弱いな。いい事だが、あまりにも弱過ぎやしないか？稜騰よ」

戦う相手が弱いという事は自分にとつて有利な事この他ならない。だからこそ八坂神は危惧した。腐つても邪神の筈なのだ。

「当たり前だ」

此処でようやく稜騰が口を開く。思えば摩馳の攻撃にも加勢せず、摩馳が死んでも顔色一つ変わらない。

「こいつは俺達を崇拜する邪神教の信者がいないのにも関わらず、此処に来るまでに慣れ通したからな。邪力なんて無いに等しかった。まあ、その為にこの集落を襲う事にしたのだがな。それに誰が好き好んであんな筋筋を助ける？」

稜騰は嬉しくも悲しくもないといった様子で、摩馳の死体へと近づく。

「死ねば喰う。それが俺のやり方だ」

グチャ グチャ

稜騰は八坂神の目の前で、既に原型を留めていない摩馳を喰らう。一口喰うごとに、稜騰の邪力が上がっていく。それでも八坂様は動かなかつた、否、動けなかつた。仲間を喰べる神を、直視できるような肝は八坂神には無かつたのだ。

それは突然

青黒い巨体には見合はない早さで、突然稜騰は八坂神に突進する。一瞬のうちに八坂神は反応し、打撃を防ぐ為に胸の前で両腕を組む。

「消し合い、だろ？」

ズブリ

邪力を纏わせていた稜騰の手刀は、安安と八坂神の下腹を突き抜く。
「ガハッ！お、お前！」
「ん？お約束で守つている所を殴つて欲しかったか？いいか？お前
は摩馳を殺した。ならば自分が死ぬ覚悟もしておかないとなあ」

ズブリと八坂神の腹から手を引き抜く稜騰。

「ふん、戯言を…」

そういう間にも八坂神の体からは血が流れ出す。神力で補おうにも、
普段よりも少な過ぎるその量では、至難の技であった。

「消えるがよい島国の神よ」

シュン

稜騰の手刀が動いた。

？？？？？

「おい」

「う~ん」

「おい！」

「何だよジジイ！！」

俺は一日酔いの頭を抑えつつ呼びかけに応える。まだ太陽は出ておらず、辺りは暗い。広場には死屍累々。全員酒を飲んで眠っている。あれ？ 慈恩ちゃんまで？

「ふむ。神にその様な口を聞くとは大層な河童だ」

「え？ 八坂様…あれ？ 男じやん」

「ほう、朝鮮の地で我を知つておるか…では妻の八坂刀刀売神を知つておるか？」

知つてゐるつて何も俺の隣で寝てる筈。ゴーヤチャンブルに神殺しの酒を入れたのは俺なのだから。

「俺の隣に…いない」

「外の地の宴会に呼ばれたとかで家を出て行つたのだが。ちょうど心配になつてのう」

「八坂…刀売神様の…」

「そうだ。夫の建御名方神である」

「これはこれは。大層な武神が現れた。かつての日本で、最強の神に立ち向かつたと言われる、建御名方神だ。強靭な武具を身につけているが、はつきり言って顔も体も草食系男子だ。実際に少しばかり武具が大き過ぎるような気がする。武具を着ているのではなく、着られていると言つたところか？」

口には出さない出してはいけない。

「八坂様は先まで此処で寝ていたのですが。何方かへ行かれたようです」

「うむ。すぐに帰ると約束したのに。守谷と一緒に飲む約束じやつたのに」

「さいですか…」

「これが終わつてまだ飲むつもりだったのかあの八坂神は…もはや尊敬に値する。

ズドオーンン！

「な、何の音？」

近くの森で大きな物音がする。俺と建御名方神の間に緊張が走る。

「河童よ。ついて参れ」

無言で走り出す建御名方神。ついて行くしかないのは普通だろうか。

？？？

ついてみれば圧巻の光景。

地面に深々と御柱が突き刺さっていた。御柱の突き刺さっている地面は、何故か血が飛び散っていた。そしてそこにはハ坂神と鬼の様な何か。対峙している。

流石の建御名方神もこの状況に ポカーンとするしかないようで、俺と同様に口を開けて突つ立っている。

その時それを変える事が起きた。ハ坂神と対峙していた鬼が、一瞬消え、次の瞬間にはハ坂神の腹を手刀で突き刺していた。

「「あ……」」

男性特有の。例えば彼女が他の男と歩いている時に出してしまった情けない声。例えば自慰を母親に見られた時に出してしまう情けない

声。

田の前の光景にそんな声を俺と建御名方神は同じく発してしまった。

伝説河童、酒を飲む

「苦しゅうない苦しゅうない！」

「ちょ、頭に酒をかけるのやめて下さい…」

「たく、河童のくせして皿が無いとはう…ははは…」

「何が面白いんですか八坂様…」

「まあ、神奈子。その辺に」

真逢ノ栄崔こと俺は八坂神、建御名方神と共に、集落の長者である知枝婆の所で酒を飲んでいる。知枝婆は後片付けとか何やら言って森に入つて行つたが、八坂神が神妙かつ余裕な顔をしていたあたり大丈夫なのだわつ。こういうのは気にしたら負け、なのだ。

飲むと言つても、実際には酒のお供をさせられている、というのが正しい。寝て起きて気がついたらここにいたというのも、自分から八坂神達と飲みたいと言つたわけではない。何が言いたいかというと、八坂神のダル絡みが非常にウザいという事だ。

あれ？ そういうえば八坂神は異国から来た邪神によつて命を…
と、思つた人もいるかもしない。実際に俺もなかなかに混乱していた。事の顛末はおいおい知れるとして、いったい何故建御名方神が八坂神を

「神奈子」

と呼んでいるのか。

理由は幼稚とも女性らしいとも取れる。建御名方神は妻である八坂刀売神を

「刀売神」

と、初めは呼んでいた。

あまり女らしく無い。女心故かこう呼ばれる事を嫌つた八坂神は、三日三晩考えた挙句に

「神奈子」

という夫婦間専用の名前を作り出した。神々にとつては名前とは重要他ならない為、こう呼ぶのは夫である建御名方神と親しき仲の守矢の神だけだそうだ。名前が忘れ去られる事は、神々にとつて存在を忘れ去られる事と等しく、消える事と等しい。それ故に神奈子と呼んでいいのはごく少數。

こんな事を考えていれば、八坂神が口を開いた。

「それで栄崔よ。すまんかつたのう面倒事に巻き込んでしもつて
「いえいえ。誠にお言葉その通りです」

「なぬ！」

「まあまあ神奈子。正直ではないか」

俺は正直に言つただけです八坂様。考えてもみれば村に滞在しただ

けで、神と神の戦いで氣を揉む事になるとは、面倒な事である。どちら俺には被害なんて何一つ無かつたが、八坂神が腹を突き刺された時なんて、本当にいろいろと辛かつた。口からいろいろと出てくるかと思った。

「いっうちに来るが良い河童！」

ちょっと…正直に言えと言つたのは八坂様でしょうが！なんで「河童殺し」なんつうお酒持つて近づいて来てるの！建御名方神も田を逸らすなよね。

「神を敬わぬ河童はこうなのだよ栄崖！」

「ちょ！名前からして河童だけが酔う酒の類じやないですか！」

「お主が我的ゴーヤチャンブルに同じ物をいれたのを知つてゐるぞ。我は」

「ど、何処で！いや、誰に！」

「神の勘じやよ、勘。そうだよのうお前さん？」

「あ、うん…勘なんだよ…栄崖君」

こつして俺は酒による夢の世界へと旅立つ。一瞬変な境目が見えたのは氣のせいか？

？？？？？

「寝入ったか…。今考えればよくお前さんの怒気に当たられて死ななかつたものだ。そんじやそこらの者では、人も妖怪も逝つてしまふのにのう」

「やはり神奈子の言つていた能力の影響か？」

「瑞、とな。厄介な力を持つて生まれた河童じやな」

一人の神が言う「瑞」という理を操る力。栄崔にとつては知るもの

操るのも早過ぎるのを、一人の神は知っていた。それ故に誤魔化し、羽生らかし、栄崔が己の力操る事のできる者になるまで見守るつもりであった。幸いにも、栄崔は真っ当な人間……妖怪になれるぐらいいの精神は持っている。いつそれがぶれるのか、それだけが一神は心配であった。

「加護でも与えようか？」

「そうさなあ……それと悪い虫が付かないように、女との縁は大きくなるまで無しにしどう」

「それは男性にとつては生き地獄なんだが……」

「だいたい賢明で聰明な人は、悪女に騙されて人生を狂わす。栄崔とて例外ではないのだろう？」

「まあ、程々にな神奈子」

「わかつておる」

その時、知枝婆が自らの家に帰つて来る音が聞こえる。たわいのない……栄崔にとつてはたわいのなくない話をしていた一人の神は、巫女が来るのを待つ。

「ただいま戻りました。八坂刀売神様、建御名方神様」

「よくぞ戻つた妻の巫女よ」

「ご苦労であつたな巫女よ。奴等の骸はどうした？よもや埋めただ

けではなかろう?」

自分の巫女がそんな無用心な事など、する事は無いのを知っている八坂神であったが、ここは一先ず聞いておく。建御名方神にとつては自分の巫女では無いのだが、一応神を祀る人間として敬意を払う。彼らがいなければ、自分達は存在する事すら難しいのだから。

「淨化の札を貼り付け、淨化の炎で燃やしました故…灰は秘技により抹消させたので大丈夫かと」

「一先ずはそれで安心だな神奈子?」

「しかしのう…また奴等の様なのは生まれてくるのであるう…天と地、神と邪神。光が無ければ闇もない」

「そう言わると元も子もないんだが…危険は去つたからいいじゃないか?」

「うむ。巫女よ、『苦労であつたな

「嬉きお言葉です八坂様」

いやはや、もし巫女が二人の邪神に気づくのが遅かつたらどうなつていたか…そう考えれば怪我はしたが、なかなかにいい結果だと思う八坂神であった。

「それにも八坂様。あの時は何があつたのですか?栄崔は起きた初めは八坂様が死んでしまつたと、泣き通していましたが

「ほう…栄崔が泣いていたのか…ふふふ

「神奈子、話がずれてるぞい」

「八坂様、栄崔の能力についてどうお考へで?」

「おい、巫女も話がずれてるぞい」

「ふむ……あれは普通ならば神級の者に似つかわしい能力なのだがな……」

考え込むハ坂神。そこに口を挟んだのは建御名方神。実の所、女性二人に無視をされたのが悲しかつただけである。

「あの河童の父親の血。何か関係がありそうだなあ。いずれにせよ、我々には解らないという事だがな」

「そうか……」

「どちらにしても、栄崔君はこれからも厄介事に巻き込まれていくであろう。それならば今は見守る他ない」

「うむ。さてさて知枝婆よ、次はあの時何があつたかじやのう!」

栄崔についての座談も終わり、本来の話を話そうとするハ坂神。

「わかつてあると思うが、自分の良い様に話を作るなよ神奈子」「わ、わかつてある」

既に傷の塞がつた腹を撫でながら、ハ坂神は建御名方神の説明も交え、知枝婆に先に問われたその時の事を語りだす。実の所、夫がいなければ自分の失態をちょいとばかし良い風に直していくかもしない、そんなハ坂神であった。

?????

稜騰がズブリと八坂神の腹からその手を抜いた時。遠くから見ていた栄崔と建御名方神は、これまた肝を抜かれた様な気持ちになった。どちらも動けず、どちらも瞑れず。

八坂神からすれば自分の命が終わる時を覚悟していただろう。信者達、近頃会った河童、夫の顔が走馬灯の様に過ったはず。そして稜騰がトドメとばかりに腕を振り下ろす。

そこで栄崔の記憶は途切れており、ここから先を知るのは今現在では一神のみ。

振り下ろされる手を止めた…否、吹き飛ばしたのは一本の矢。神力を纏つたそれを打ち放ったのは誰でもない日本の軍神、建御名方神である。初めに栄崔に会った時の細さは消え、そこには最強の一文字がピタリと当てはまる男が弓を構えていた。

その霸気に当てられた栄崔は敢え無く失神。そこから先は捕食者と被捕食者の乱舞。建御名方神が弓を放つ度に、稜騰の体は吹き飛び、

命が消えていく。

建御名方神は怒気に埋もれる頭の中でどこか自分に命乞いをする声を聞いたが、それは呆気なく消え去り、妻を傷つけた者を塵にした。これが建御名方神であり、八坂刀売神の夫である。

時間が流れ、風の流れが元に戻った頃、気がつけば妻を治す巫女と、塵となつた邪神だけがその場には残つていた。

?????

朝起きればそこは見知らぬ天井、否、近頃は見慣れた知枝婆の家の天井。

「そりいえば俺は…酒か」

昨日は八坂神に酒を飲まれダウンしたんだったかな。頭がズキズキと痛むが、良い匂いが台所の方からするので行ってみれば、知枝婆が朝飯を作つていた。

「知枝婆、早起きですね。八坂神達は何処に？」

「帰つたぞ。昨日の夜に私の家の酒をたらふく飲んだあとにだがな」

「本當ですか！何故何も言つてくれずに…何か伝言とかは…」

「特にないぞ」

「さいですか…」

「二人の神。特に八坂神とは仲良くなれたと思っていたんだが。人生…河童生とはいかなるものか。」

「まあ、これを渡してくれと言われたのだがのう。ほれ」

「うあ！何故故に投げますか！」

「テンプレートじやよテンプレート」

見ればお守り。一見すれば変哲一つもないお守りだが、御柱と弓矢が交差してゐる絵柄からして、これは八坂刀売神と建御名方神が神力を込めて作った物だとわかる。こういふのは小学生以来だなと思いながら、懐にしまう。

さて、これからどうするか…

「北へ行くのだろうが？」

「知枝婆…何故故にそれを知つていますか？」

「婆の勘じやよ、勘」

「勘ですか…取り敢えず正午にはここを発とうと思います。今まで

お世話になりました」「

「ええんじやええんじや。朝飯ができるまで他の人に挨拶でもして
こいな。最後の最後で河童だとばれぬよつこの」

？？

挨拶と言つても、この村で世話になつたのは知枝婆と慈恩ちゃんだ
けなんだが。まあ、適当に挨拶しておこう。

暫く歩けば、よく畠仕事を手伝つていておじさんに出合つた。麦わ
ら帽子に白いシャツのよついたもの。手押し車を引いてくる。いつも
と変わらぬ。

「よつー栄崖君ー今日も畠仕事を手伝つてくれるんかい？」

「いえ。旅出の挨拶に来ました」

「そつかーもう行くんかい。近頃の若者はよく動くんもんだなー！」

「若者…ですからね」

自分はあなたより年上なんです、といつ言葉を飲み込み適当に相槌
を打つ。

「そつかなあ栄崖君。知枝さんからこれ渡してくれと言われてい
てな。ほらよ」

やつぱりおじさんは農具を積んでいた車から、麻袋に包まれた物を渡される。

「なんですか？」

「ああ、まだ開けないでくれ。お前さんが無償に腹が減った時に開けろとや」

「さいですか…」

予知能力のようなものを持つてゐる知枝婆の事だ。素直に従うのが良策だろう。

「ありがとうございます。確かに受け取りました」

「おう！達者でな！」

「では」

おじさんは手を振ればトコトコと車をおして歩いて行く。自分もいつかああやつて自分以外の者の為に働く事になるのだろうか？だとしてもそれはずっと先だろうが。

別れの挨拶？を終えた俺は、自分が特に哀しんで無い事に気がつく。これが妖怪特有の長い生がそうさせているのか、別れというのがあまり怖く、寂しくない。

またもや暫く歩けば、今度は慈恩ちゃんが家影から出でてくるのが見えた。大分遠い所だが妖怪故の視力ではっきりと見える。慈恩ちゃんからはこちらは見てないようだがな。

大きな声で声をかけようとすれば、慈恩ちゃんの後ろから、先に脛を蹴られた少年が一緒に現れる。

——恋

二人のウキウキしてゐる表情を見る限り、幼いながらも小さな恋をしているのであらう。妖怪の俺が立ち入る時ではない。

俺はなんとなくの哀愁を感じながら知枝婆の所へ戻る。この間10分程度。短い挨拶であった。

?????

「行つたのう…」

「行つたな…」

「行きました故…」

栄崔が村を出るのを見守る影が三つ。

——八坂刀売神。建御名方神。知枝婆。

「それにしてもあの隙間妖怪にまで目を付けられるとはのう」「栄崔が持つ能力は強大だからな。生きれば生きる程強くなる妖怪

でもあるからな

「どうなりますかな？あやつの未来はどうにも見えませぬ

「どちらに転ぶかの？…」

二人の神と一人の人間は顔を見合させ。

強大な力を持つ者は、この世の良い物悪い物全てを引き寄せる。

それがただただ心配なのである。

「案ずるより産むが易し！守谷の紙も待つておる。飲みに行こうかな！」

「神奈子…使い所が違う。八坂様、もう酒はありませんが」

「…」

無視られた男の心情とは裏腹に、冬の寒さはゆっくりと消えていくのだった。

伝説河童、山を登る

真逢ノ栄崔中國田指し北を田指し歩き続ける一年間、山越え谷越え町を行く、気がつけば丁度半島の付け根の辺り、この山越えれば中國だ、意気込み喝入れ登りゆく、色々出てくる難登山。

俺は八坂神達と会った村を出発した後、

——北へ向かう

といふ事以外は意識をせず歩き続けた。相変わらず能力は盡すら見せず、体力ばかり無駄に伸びて行く。

今歩いている所は推測するに朝鮮半島の付け根辺り。正確な境目などわからないが、確実に中国に近づいている。ところで最近は、何故自分が中国を田指しているのかすら忘れる時がある。ボケの進行が早いのか。

にしても山が多い。

村を出てから一体幾つの山を登降した事か。妖怪故疲れる事は稀だが、山を越えるよりは、町で遊戯を楽しむ方がいい。と言つのは世の常、俺の常。

——岩、倒大木

これらが障害物となつて俺の歩を遮る。

生え、生き、死に、腐り、消える。人の干渉の無い山とは、全て物が、誕生から消滅まで途轍もない時を必要とする。要するに歩きにくいのだ面倒臭いのだ。しかしそれが故に小動物や弱小妖怪にとっては絶好の隠れ場所でもある。幾つかの妖氣を感じるが気にする程でもない。

なんと言おうかこの森には妖怪といつよりは、妖精が多い様に感じるな。

憶測に過ぎ無いが

「トロ」や「ナウシカに出てくるダンゴムシ」や「顔シ」

なんかも見たき氣もある。

ごめんなさい。ジブリです。はい。

顔ナシなんて遠くの木の影からじーつといつもを見つめてくるもんだから、石をぶん投げたら、スーーと消えてしまった。いや、怖かつた。

話が逸れた。

兎に角この山は普通の山とは少し違う。だからと言つてこの山を迂回するわけでもない。横に長く連なる山なので迂回が出来ないと言うのが事実である。登る以外道が無いのである。オンリークライムだ。

自分のこれ迄の旅行記をブツブツと転じていれば、暫くして、木々もなく少し開けた所に綺麗且つそこそこ大きな泉を見つける。丁度喉も渴いていた事だ。有難くいただこう。

水面を覗き込めば、清く澄んでる水。魚や水草がゆつたりとひざめいていた。

「ふはー..美味しい」

体に染み渡る。もしこれが炭酸飲料だったら泣ける、とか阿呆な事。暫くの間、卵が先か鶏が先かについて考えつつ、休憩をしていれば、丁度答えが出かかっているその時に

——殺氣

本能的に身を引くが、遅かったようだ。俺は何か強靭なる力によつて、強引に水へと引きずり込まれた。

??????

先程までどうやって妖力を隠していたのか。周りの魚は消え、案外に深かつた泉の底へ引きずり込まれる。その代わりに出て来たのが俺を水へと引き込んだ張本人。

水の妖怪の俺に水の中で戦いを挑もうなど笑止番宣！森羅万象！

一度こんなのが言つてみたかっただ俺。しかしその自信は、敵を見る為に振り返つて直ぐに消えた。

――水虎

中国や日本の妖怪である。よく河童と混同されるが、実質河童よりも凶悪な妖怪だ。文献によれば四十八の河童の親分ともされ、水辺で遊んでる子供などを引きずり込み、食べてしまうという。姿は皆さんの想像する河童をより凶悪にすれば、それだけでかなり正解である。唯の人間が水虎を退治するには、水虎が喰らった人間の骸を小屋の中に入れ厳重に戸締りし、腐らせる事によつて水虎は退治できるそうな。一緒に腐つてしまつといつ。

自分よりも高位の存在。妖怪とは人の恐れより生まれた故、強さも凶悪とも全て其れに左右される。例えば、

龍は神聖と考えるから龍は神聖として、猫又は尻尾が一つに別れている、と考えるから猫又は尻尾が別れているとして、暗闇には何かがいると考えるから暗闇には妖怪がいる。

水虎は河童の親分と恐れている時点で、自分は水虎よりも下位の存在なのだ。一応は抵抗するが、まるで歯が立たない。

ゆっくりと口を開ける水虎。河童故に水の中でも視界は聰明な為、余計に隅々まで見えてしまう。鋭い牙に紫色の舌。嫌だな。

妖怪の世界は弱肉強食だから、自分が死の存在から逃れられるとは思っていなかったが、ここ迄早くに来るとは。

死を覚悟した時程時間はゆっくりと流れ。接近する巨大な口も、上から煌き落ちてくる剣も、それは蝸牛の歩く速さと等しかった。

?????

「俺、呂 洞賓…宜しくな…」

「あ、俺は榮崔。真逢ノ榮崔だ」

ずぶ濡れの状態で青年と向き合っている。同じく青年もずぶ濡れである。背は俺より高く、その目には強く澄んだ光が灯っている。背中には剣を背負い、外見は俗に言う孫悟空の様な格好。雰囲気は色々と普通離れしている、と言えれば良いか。

「先は助けてくれてありがとう」やれこます」

「いや、同じ人として当然の事だらう…とこりでお前はなんでこんな所にいるんだ?危ないのに。師匠の弟子になりに来たのか?それならやめとけ。師匠は弟子は一人しか取らないからな!そんでも俺がその一人弟子な!」

よく喋る青年である。

「いいえ。ただ山を超えたいただけです。お助けありがとうございます」

した。では

この青年、俺が水に引きずり込まれるのを見て、咄嗟に白麪の剣で水虎を切ったそ�だ。

水の中で水虎を仕留め、俺を助けた辺り普通の人間ではない。修行、と言っていたから仙人や陰陽師の駆け出しかもしれない。だとすれば「この山に妖怪が少ない事も頷ける。何方にとっても関わりたく無い為、立ち去る事にする。

「そんな事言わずに泊まつていけよ！毎日師匠と一緒にりじゅつまら無いんだ！」

「で、でも俺は山を…」

「もう暗くなるから危ないぜ。先の水虎よりも厄介なのがこの山には沢山いるんだ。特に夜はな。だから泊まつていけよ！な！」

「しかし…」

面倒事には首を、否、手すらも突っ込みたく無いのだが…確かに暗くなつて來たし、先の恐怖も残つてゐる。此処はお言葉に甘えるとしようか。しかしその、師匠とやらに妖怪とばれなければいいが。

「わかりました。泊まらせて頂きます」

「おう！宜しくな栄養！」

「はい。呂…さん」

「俺の事は兄貴でいいぜ！」

「わかりました…呂兄貴」

「にしし。呂兄貴…俺が兄貴」

いつか俺の方が年上なのを教えてやるひつと想ひつ。

?????

呂 洞賓の師匠は鍾離権と言つた。なけなしの知識を集めてみれば、この二人、仙人コンビ、半端ない。中国の伝説の八仙の内の二人なのだ。これは妖怪とばれたら

「てーへんだルパン！」

とか言つてみる。しかし鍾離権は物静か、というよりも何も喋らない。いたちらしく、山の天辺にある質素な小屋で初対面を果たした時も、その古老だが大柄な体格からは、想像でき無い程の優しい目で俺を見つめ、小屋の中に入つて行つてしまつた。その小屋の中には質素な机と椅子しか無いのに落胆するのは後の話。

呂 洞賓は師匠の行動を信頼の合図ととつたらしく、笑顔を向けてくる。嫌な奴ではない。

?????

呂 洞賓が

「仲良くなるには飯からだ！」

と豪語する故に、今は三人で夕の食を囲んでいる。男三人と言つても悲しいが、もつと悲しいのがその内容だ。

木の実数粒。

仙人はその殆どを自然からの氣で貯うと言つるのは本当だったのか…

「ところで栄養。お前幾つだ？俺は四十三だ！仙人だしな！」
「あ、ええと、俺は一七です」

咄嗟の嘘

「そりゃ…やつぱり俺の方が年上だつたか！ははは…」
「ははは…」

何が可笑しいやら笑い出す呂洞賓。つられて笑つてみるが、俺の視線はすつと鍾離権に向けられている。勘からするにこの男、俺が妖怪もしくは人外だというのに気がついている。しかし何も反応せず。まるで知枝婆のようだ。年寄りとはそのようなものか。

「五仙！出でおいで！晩飯の時間だ！」

一人考え事をしていれば、突然呂洞賓が声を上げる。すると小屋の窓や隙間から

——ネズミ キツネ イタチ ヘビ ハリネズミ

がもうもう姿を表す。五匹は順序良く並び、先から俺たちが囁つて

いた木の実を一つずつもらひ。

「呂兄貴。それは…」

「おう！こいつらは五仙つて言つんだ。灰仙がねずみ、胡仙がきつね、黄仙がイタチ、白仙がハリネズミ、柳仙がヘビ。人呼んで中国の大五仙！」

「は、はあ…その、飼い犬のよつなものでしようか？」

その言葉を発した途端、突然ヘビ、柳仙が尻尾で俺の脛を引っ叩いた。

「痛！なにするんだ！」

「ははは。こいつらは仙人の相棒なんだぜ！それは怒るぜ…」

――五仙

中国の仙人が扱う靈獸である。仙人に付き従い、手伝いをする役割を持つ。靈力を持ち、そこのらの動物なんかよりはよっぽど強い。寿命は100年程で、破格である。しかし仙人から見れば短いもので、熟練した仙人になれば別れが辛いので、従えて無い事も多い。

「あの～彼らも仙術を？」

「勿論だ！見たいか？」

「是非にでも見てみたいのです」

「よつしゃー！」

五匹は自分が自分がとでも言つ様に呂洞賓へと尻尾を振る。呂洞賓が選んだのは柳仙、ヘビであった。

喜びを尻尾を振る」とによつて表した柳仙は

シユン

狸の様に葉っぱも使わず、忍者の様に煙も使わず、瞬きする瞬間のうちに背が高く切れ田の青年へと変身していた。

「これは凄い……」

「だろ？俺の五仙は凄いんだ！」

人の姿で握手を求めてきた柳仙は、それを終えるとまた元の蛇の姿へ戻る。妖獣でもないのによくやる蛇である。この間鍾離権は一言も喋らず。椅子に腰掛けて木の実を齧つているだけであった。全く呂洞賓と鍾離権を足して二で割れば、常識ある人が生まれるのではないか？

兎も角、俺、栄崔はテンションの高い仙人の卵と、無口の仙人の家に滞在する事になったのだ。

？？？？？

ガツ～～～！

隣では呂洞賓が鼾をかいて眠りこけている。仙人らしくない仙人第一位だなこれ。食事も質素とくれば寝床も質素。床に藁を敷いているだけである。仙人とは如何なるものか。

そう言えば鍾離権がいない。いずれかの時に消えてしまった。不本意ながらもああいうのが仙人の鏡ではないだろうか？欲を持たず、目的を持たず、只々世を彷徨う。

鼾のせいで寝れないでいると、白仙、ハリネズミがちょこちょこと歩いて来た。話し相手にでもなってくれるのだろうか？

「どうした？」

「（いや、その、お腹が空きました故…）

「お前喋れるのか！」

「（いえ。私の感情を念力によつて流し込んでいるだけです）」「

「お前凄いな…それよりかと、五仙つて聞いた時から、一つ聞きたかつたんだけどさ…」

「（なんでしょうか？）」「

「ネズミとハリネズミつて被つてない？キャラ的に

「（…お腹が空きました故…）」「

ちくしょうスルーされたか。まあ、俺も腹が減つていてるから外にて、木の実でも取りに行こと思つ。

「木の実あさりに行くけど来るか？」「

「（はい。ただ、夜は危険な為に、私から離れないとくださいね）」「おう」

？？？？

外に出て暫く探索する事十分程度。白仙が案内してくれた所にはあの時の木の実が沢山実つており、俺達は月を見ながらぽりぽりと嚙つていた。月は青く輝き、世界を濃い藍色に染めあげていた。心なしか木の実が美味しい。

「白仙、仙人つて何なんだ？」
「（はい？）」

首を傾げるハリネズミ、白仙。

「いや、何で人間なのに人外の力を持つていてる?」

「(ああ、それですか。絶え間ない修行のお陰ですよ)」

ハリネズミの表情は解らないが、尊敬の意で話してると取れる。そんな話し方である。

「何故修行をする?」

「(生きる為です)」

「生きる為?」

「(はい。仙人とは死ぬべき命を、俗世の欲を捨てる事によつて、無理矢理に伸ばしてゐる故。輪廻に戻す為に死神が命を狩りにやってくるのですよ)」

「それは大層な…」

確かに輪廻を外れている。本来人間は三百も四百も生きたりしない。

「欲を無くすとはどういう事か?」

「(それは私には難しいです。俗世の欲を無くすのはわかります。しかし生の欲とは…)」

暫くの静寂がハリネズミと河童を包む。そして白仙は徐に語り出した。

「（生きる欲を無くせば仙人になり永く生きる意味が無い…しかし
あり過ぎれば仙人としての力を失う。私にはわかりませぬ）」

「そうか…」

「（取り敢えず仙人は俗世の欲から捨てるのですよ。俗世の欲を捨
てれば捨てる程、自然の氣も取り込み易くなる。その為にこの様な
山奥に住むのです）」

月は相変わらず蒼く光り輝いている。仙境だからなのか全てが有り
のままの雰囲気を受ける。木も空も草も、ここにいる仙人も。

「俺には呂洞賓が俗世の欲を持つてないようには見えないんだが?
（確かにそう見えますが…欲があれば40も生きてあの姿はあり得ませぬ）」

「そうか…でも奴は本当に仙人には見えないのだがな…。ほら、鍾
離権。あれを仙人と言うのでは?」

「（ああ見えて呂様は鍾離権よりも生への欲がありません。その他
の欲も無いに等しいです）」

同じく表情は読めないが、悲しみの籠った声である。

「（過去に色々ありました。死のうとしたのを鍾離権に救われたの
です。あの目の輝きですら偽りなのかもしれません）」

「…難しいな」

「（難しいです）」

暫く無言で木の実を齧り続ける。仙人とは如何なるものか。普通が

一番ではないのか？

？？

その時俺は本田一度田の殺氣を感じた。

その殺氣は俺へのではなく、白仙へのもの。

瞬く瞬間、俺は白仙を庇う様に飛ぶ。そして俺の背中には鋭い爪が振り下ろされた。

爪を振り下ろした張本人は、目的を達成出来ずに舌打ちをする。一方で、それを庇つた者の死を確信した。しかし目的は庇つた者ではなく、食べば大いなる力となる仙の字の付く生き物の肉であった。

——予想は変わる。

月の明かりに照らされ、銀色に光る鱗。それが攻撃を受け止めている。それは割れ、剥がれ、血を流していくが、自分の攻撃を受け止めるには充分な硬さがあった。そして攻撃された者からの殺氣。生

あつての力である。生きる為に逃げ出さうとするが、それは胸を貫かれる事で、永遠に叶う事は無かつた。

白仙を庇う為に飛んだ瞬間、鋭い痛みが背中を襲う。だが護鱗のお陰で、表面が傷を負つただけ。攻撃を仕掛けた物の外見は、熊の様な生き物をおぞましくさせただけであつた。

要するに——低級妖怪だ。

殺氣を放ちながら、逃げる背中に拳を放つ。そういえば初めて生ある物を殺すな、と考えつつ、血の手が胸を貫く感触に吐き気をもよおす。

——ドクン

生き物から物へと成り下がった物を見つめる目は、冷淡な物だっただろ。

——ドクン

実際は叫び出したい気分であつたが、それを抑える為の行動だったかもしれない。何を考えたのか、俺は其れを喰らおうとした。

——ドクン

隣で白仙が止める声が聞こえるが、何かの意思によつて手を骸へと近づける。

止めて欲しい

妖怪としての本能：

だとしたら止めて欲しい

錯乱故の行動…

だとしても止めて欲しい

兎に角止めて欲しかつた。こんな物を喰らうなんて嫌だ。自分は妖怪であるが、それ以前に元は人間だつたのだ。抗う意思の無い手はゆっくりと死体へと近づいていく。

——止めて欲しい

それは意外な方法で叶えられた。

宙を飛んだ、否、舞つたというのが正しい。何者かの力によつて宙を舞つ俺と白仙。気が付けば、一人して小屋の前に立つていた。

??????

「それで…腹が減つて外に出たと？」

「「（はい）」」

暫しの沈黙

「白仙！夜は危険だと何度も言えばわかる！それも客人を巻き込んで！」

「（「めんなさい…）」

おかしいな。鍾離権。この人普通に喋るじゃん。

俺と白仙は怒り心頭の鍾離権に怒られている。それも小屋の外で。何でも仙の付く生き物の肉は、人外から見れば副作用無しのドーピング剤の様な物で、仙人に成り立ての力の弱い者や、仙獸はよく狙われるという。それは人外の力の増す夜が一番危ない。だから故に鍾離権はここまで怒っているのだ。しかしこの怒鳴り声でも起きない呂洞賓は…

「よいか！今度こんな事があつたら、唯じやすまさん！白仙！わかつたな！」

「（はい…）」

白仙が余りにも可哀想なので

「まあまあ、そこまで「黙つとれー。」

「はー。」

怖いよこの仙人。一応客人ですよ俺。あなたもそう言つてましたよね？

「いいか白仙。お前が死んだら町の心は本当に消えてしまうぞ。そんな事儂は見ておれん」

「（もう…一度といったしませんお師匠様）」

「うむ…もう行きなさい」

話が終り、白仙は小屋の中に入つて行く。俺もついて行きたかったが、俺にだけ何も言わない鍾離権ではない。

「栄崔といつたな？」

「はい…」

「先は辛かつたろう？」

「いやまあ、他人が叱られているのを見るのは

おかしい事は言つてないはずだが、鍾離権は静かに微笑む。

「それではない。先に、骸を喰らいたくなつたるう？」

「それは…あれ？妖怪だつてばれてます？」

「儂らを誰だと思っておる？呪以外皆気づいておる」

やはりばれていたようだ。しかしそれでも何もして来ない辺り、平氣なのだろうか。

「お主は妖怪の癖して、心はまるで人間じやのう。だから先の衝動を堪えたのだろう？まあ、儂が止めなければ危なかつたがな」

言葉を無くす。この仙人は俺の全てを見通しているらしい。

「生きるとは難しいのじやよ。人間…ではなく、生きる物全てにとつてな」

「そうです…ね」

「何ならどうじや？仙人に、いや、仙河童でもなつてみるかの？」

戯けた顔の鍾離權。この人もこんな顔をすることは。

「いえ。俺は河童です。それにまだまだやらなければならない事も沢山ありますし」

「人探しか？」

「そうです。何故わかりました?」

「勘じやよ。仙人のな」

「さいですか…」

この老人と喋つていると不思議に気持ちが安らぐ。

「紅糸鈴という人なのですが…」

「なんじゃ。探しているというのは姉か」

そうですか。お姉さんでしたか…て、あれ?

「紅糸鈴つてあなたの姉さん!」

「そうじや。300年程会つてないがのう。姉に会いたいのなら、
気にせんで良い。姉は会いたいという人の所に突然現れるからのう」

「あれ?でも苗字が…」

「ああ、それはのう。儂が仙人になつた時につけたのじや。鍾離権
という名をな」

「さいですか。貴重な情報を有難うございます」

「はつはつは。良いんじや良いんじや。ほれ、早う寝るんだ。明日
は早く起こすからのう」

「は、はい。本当に有難うござります。では」

こうして俺は月を眺める鍾離権を置いて床に着いた。次の日朝にはこの山からおさりげないでいる事を疑わず。

云説河童、正座する

日を開ければ晴天。見渡す限りの青空である。やまつ山の上の日
覚めは気持ちが良い。少し寒いがな。

暫しの間自分が何故ここにいるのか考える。そして仙人云々の事を
思い出し、一人納得する。寝起きの人間—河童—にはよくある事だ。

隣では呂洞賓がそれはだらけた顔で眠っている。この顔をして昔に
自ら命を捨てようとした事があるなんて信じられない。いや、全く。

いや、可笑しい。俺は日を醒ましたが、外には出でていない。何故屋
根も壁もない?何故空が見える?そして理解。

「おい、呂兄貴、起きろ……家、なくなってるぞ
「んん……何だ朝か……清々しい空だな」
「……」

暫しの間

「おい……屋根がないぞ……」

全く鈍い奴である。普通第一声は、屋根が無い！だろうが。まあ、自分も初めは気が付かなかつた訳だが。呂洞賓には分かるまい。

「何があつたんでしょうね。隕石でも落ちましたか？」

いやまあ、隕石が落ちたら俺たち死んでるがな。適當な冗談だ。

「隕石って何だ？」

「隕石を知らないと？宇宙から降つて来る石ですよ」

「ん？」

「だーかーらー、空からですよー」

「へ、へえ～なんか凄いな」

未だに「隕石」などと言つ概念が無いのだから、呂洞賓が其れを知らないのは当たり前。という事に気が付いたのは大分後である。

「まったく……」うつ時はどうすれば良いんだ？

「あなた僕の兄貴でしうが？自分の家なんだし自分で…

次の言葉はある光景を見たために紡ぎ出される事は無かつた。今いる山の天辺にあるこの小屋。正確には存在一過去形一していた小屋だが、周りを見渡せば、その人自身の視力の加減では一合目辺りま

で見渡せる。

俺が見たのは其れはまさしく隕石が落ちた様な陥没した地面。木々は薙ぎ倒され、地面は抉られている。其れは丁度、小屋から始まり、今俺の目を掴んで離さない場所へと続いている。人影が見えるが流石に誰かは確認できない。

「呂兄貴。あれ」

「うん？」

暫くの間、悲劇の主人公役を脳内で演じていた呂洞賓が、こちらを振り向く。視線は自然と俺の見ていた場所へ。

「死神……今日だったのか。走れ！栄養！」

叫んだ呂洞賓は人外の速さで走り出す。人外の筈である俺だが、それでもぐんぐんと離される。仙人、恐るべし。

??????

着けば戦場である。草むらから覗き込めば

三人の男女

——鍾離権

何となくだがそんな気がしたのだ。

——赤髪の長身の女性

その体からは何か揺らめいており、まるで大地がその女性のに応える様に波打っている。恐らく人外だろう。何故か鍾離権を睨んでいる。

——赤髪の少女

こちらの方が少し髪の色が明るい。身の丈程の鎌を持っており、同じく鍾離権を睨んでいる。

「何だこれ？修羅場？」

呑気な事を言つてみるが呑洞賓の険しい表情は変わらない。しかし
その目はどこかキラキラしているのだった。

初めに鎌を持った少女が動く。脚力では出せない滑らかな速度で鍾離権に近づく。加速すら無かつたその移動に、俺と呂洞賓は息を飲んだ。少女の手に持つ鎌は一瞬にして鍾離権の首に襲いかかる。飛びだそうとした俺だが、其れを何故か呂洞賓が止めた。

ひゅん

確かに首を切り落とした。そんな顔をしていた少女の顔は、情けない素振りの音と共に、驚きに変わる。そこには鍾離権はいなかつたのだ。正確には鍾離権は仙術を使い霧になっていた。そのまま少女の、振り切つてしまい動きの無い鎌を蹴り上げた。勿論、瞬時に霧から元の姿に戻つてからだ。

くるくると回りながら飛んで行く鎌を呆然と見つめる少女。

「流石お師匠様！」

呂洞賓が囁く。

「うわああーん！私の鎌がああー！」

先の威勢は何処へやら。見事な女走りで、鎌の落ちたであろう林の中へと走つて行つてしまつた。ホツとした顔の鍾離權であったが、すぐにそれは変わる。

「岩碎掌！」

その掛け声と共に、先まで鍾離權と少女の戦いを傍観していた女性が動いていた。咄嗟の事に避ける鍾離權。

バアアオオオ

奇妙な音と共に地面が碎ける、否、弾けた。内側から弾け飛んだのである。あれ、喰らつたら死ぬ。うん。間違いなく。

攻撃を緩めない女性。避けた鍾離權に追い討ちをかける。

「龍昇脚！」

音速の速度で放たれた蹴りは、鍾離権に仙術を使わせる暇もなく、顎へと打ち当たる。

上空へと打ち上げられた鍾離権を、女性は追いかけ

「波鉄槌！」

清々しい美声と共に叩き落とした。

よくアニメで人が高い所から落ち、地面に埋まるシーンがある。まさしく鍾離権は其れだった。走る時のポーズで地面に窪みを作っていた。仙人もへつたくれも無い。

そして女性の目は、草むらから覗いていた俺と呪洞賓に向けられた。

??????

「何処に行つたの私のかまああ～」

林の中の静寂を搔き乱す様に、一人の少女が歩き回っていた。この少女、死神である。毎度の事、輪廻を外れた人間を輪廻に戻す為に、現世にやって来る。しかし今までその仕事をやり遂げた事はない。単純に弱いのだ。

「あ、あつた！」

鎌は背の高い木の胴に突き刺さつており、手が届かない。仕方なく木を登る少女。スカート姿の少女が木を登ればどうなるかわかるだろうか？丸見えである。

「…」

きやん！…と言う可愛い掛け声と共に、小町という少女は今しがた手に取った鎌と共に、地面へと落ちてしまった。落ちた先には札を持った女性が、苦笑を湛え、立っていた。

「映姫様あ、驚きましたよお」
「まったく…。今日も失敗ですか？」
「だつて…だつて…あいつ、強くて…」

涙目になる少女。

「それに映姫様だってパンツ見えてますよ。くま柄ですか」「なにを！」

バツ！と自分のスカートの前を抑える。少女が落ちて来て、足を木に向けて倒れていた。其れを上から覗き込めば、あらやだ股の間に少女には丸見えだったのだ。

「いいですか！」この事は秘密ですよ！他の人に言つたら！」「わかつてますよ映姫様。只、映姫様もおつちよこちよいな所がつて安心しました」

にやける少女。その笑みは、心の底から映姫という女性を思つての笑みであった。

「少し怪我をしていますね。早く帰つて手当しましょうか」「はい、映姫様」「もう、泣いてはいけません。あなたは死神なのですよ」「泣いてませんよ！」
「ほら、泣き止んだのなら、少し休暇を上げますから」「やつたーー早く帰りましょーうー！」

「 」の子は…」

何処か親子の様な二人。突然現れた扉に、二人して消えて行く。こうして林の中は静寂を取り戻した。

？？？？？

栄崔と仙人一人。正座である。

何故か三人して赤髪の女性に説教されている。

纏めれば

女性は久しぶりに鍾離権の家を訪れた。そこで鍾離権が少女を押し倒しているのを発見。全力で成敗する事にした、らしい。

しかし鍾離権曰く

あの少女は自分の命を狩りに来た死神で、取つ組み合いの最中が、押し倒しに見えただけである、らしい。

「いいか晴鐘？例え死神だとしても押し倒しなど「だからやつて無いと言つてるではないですか姉上！」

「ぬ、姉に口答えか！勝手に改名したのも共に御仕置きが必要だな

！」

「もう唯の小童では無いのですぞ！」

鍾離権が少し格好良い事を言つた氣もするが、殴られる蹴られるの暴行である。鍾離権にとつて唯一の助けは、仙人故の頑丈な体だろう。南無南無。

「（呂兄貴。あの人ガ鍾離権さんの姉？）」

「（そうだ。紅糸鈴だ。怖いぞ）」

とばつちりを受けた俺達は、御仕置きの終わる小一時間の間、ずっと正座であった。足が痺れたのは言つまでもない。

?????

「それで、私に教えて欲しい事があると？」

「はい。能力の事なら紅糸鈴に聞け、と何人の人に言われましたので」

「偶然にしてはお前に其れを言つた者達は…人外の類だろ？？」

「ええ、まあ…」

「永く生きていないと中国にいる私の事まで知つてゐる筈がない」

小屋のあつた筈の場所。俺と紅糸鈴は向き合い、話合つてゐる。二人の仙人は滝打たれにでも行つたらしい。

「それで、能力の名は？」

「「瑞を操る程度の能力」です。どうしても瑞の意味が理解出来ません」

「ほう…」

考え込む紅糸鈴。

何か不可解な点でもあつただろうつか？

「瑞とはな…中国では、縁起の良い、という意味だ」

「え？ それじゃあ僕の能力は…」

「いや、其れを操る物では無い。恐らくは瑞獸を、又はその力を操る力だらう。永く生きて來た経験上だがな」

――瑞獸

応龍、鳳凰、麒麟、靈龜の四大瑞獸を頂点とする靈獸達である。人にとっての瑞兆、即ち良い事を齎したり、良い事があると現れる靈獸達である。各々が強大な力を持ち、人外を遙かに超す存在だ。古来よりその恩恵を受ける為に、ある者は讃え、ある者は脅し、ある

者は仲して來た。兎に角、凄いのだ。

「其れを操ると？」

「うむ…だがお主何者だ？一介の河童であるに」

「僕にもわかりません…」

別に不愉快でも無いのに沈黙が流れる。

「その、紅糸鈴さんの能力は…」

「ああ？私が？」「龍脈を操る程度の能力」だ。その、あれだよ

「なんですか？」

「そうそう。地面には、龍脈と呼ばれる氣の流れが無数に流れていてな。そこの上に立つていれば家内安全、万年豊作、子孫繁栄なんでもござれなのだよ。私は其れを戦いに少しばかし応用しているんだ

だとしたら先の驚異的な攻撃も頷ける。地面が弾けたのも、その下にある龍脈から氣を集めて爆発させた為に、そうなつたのである。もし喰らつたら…

「いやしかしお前の能力は私のよりも数段格が上だ。私の能力は唯、龍の力が溢れ出している龍脈の力を借りているに過ぎない。しかしお前は竜そのものの力を操れる。天晴れだな」

「さいですか…」

「いつ言われば使ってみたくなる物だ。早速表に出て試す事にした。

？？

辺り一面焼け野原…蟻から見たらな。

鳳凰を思い浮かべながら紅い火の玉を創り出す。出来た物は蟻から見れば太陽の様な大きさだった。投げつけても少し地面が燻つただけで、到底戦闘には使えない。いや、遭難した時にいいかもな。

「まあ、落ち込むで無い。初めはみんなそんなもんだ」

「はい…」

紅糸鈴が慰めてくれるが、長年の夢だった自分の能力がこの様なちつぽけたでは泣く。

「元々瑞獸はある条件の元現れるのだ。鳳凰なら徳のある王が生まれた時、麒麟なら仁の心を持つ王が生まれた時。その他にも？豸というのもあつてな。優れた裁きの心を持った者が現れた時に現れる。自分がそう成らなければ、力もうまく使えないであろう」

「そんな事言われましても…」

「いや、待て。お主河童じゃらつ？治水か…」

突然紅糸鈴が一人でブツブツと呴き始める。でも、突然小さいが火の玉を創り出せる様になつたのだ。確実に能力が使えたという証拠ではないか。

「そうだ！靈亀だ！」

「はい？」

「靈亀はな。治水の才を持つ王が生まれた時に現れるのだ…お前は河童故に水とは縁が深い筈だ！」

そう言われて見ればそうかもしねない。河童は別名水神とも呼ばれる程、水と縁が深い。

これならもしかするともしかする。

「水」

こう心の中で唱えた瞬間に、全てが変わつた。虫の蠢く感触、花が風に揺られる感触、紅糸鈴が草を踏み締めているその全てが自分の頭の中に流れ込んで来る。この世全てに存在す水。H₂Oである。其れに関わる全てが俺には理解が出来た。自らの身体を血液の流れさえも。

「どうだ？」

「凄い…です」

「そうかそうか」

俺の一言で全てを理解したらしい紅糸鈴。

これは波乱万丈の人生、河童生に磨きがかかると思った事は余談である。

そして河童村の秘書庫で見つけたあの本の作者「紅糸鈴」。これは運命なのかと思つた事も余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951x/>

伝説河童の数奇な人生

2011年11月20日05時42分発行